文政十一年三条地震の記録

板 垣 俊 一

この日本列島に住むかぎり洪水と地震そしてまた噴火などによる自然災害から逃れるわけには行かない。その思いを強くしたのは、昨年の三条水害と中越大地震だった。とりわけ全村民が離村することになった山古志村のニュースは、地震の被害の大きさを我々に印象づけた。下越であの揺れを感じたとき、即座に四十年前の新潟地震を連想した人も多かっただろう。しかしまた三条水害とともに昨年の地震と重なるもう一つの歴史的な地震が筆者には連想される。それは今回の震源地とさほど遠くない場所で起きた江戸時代後期の三条地震のことである。今から176年前、文政11年（1828）11月12日午前７～８時ごろのことで、旧暦11月だから今回の地震よりも時期的に遅く雪の降るころであった。昨年は水害の年でもあったが、文政大地震の年も全国的に台風による洪水の被害があった点で共通する。この地震は、越後加茂町の儒学者斎藤真幸が創作した『瞽女口説地震の身の上』によってその惨状が全国に知られるに至ったことでも有名である。今回の地震をきっかけにいくつかの地域で今でもその写本が話題になっているほどであり、たとえば、インターネットによる情報ではあるが、『岐阜新聞』2004年10月30日付朝刊には「越後地震「口説」で克明に／飛騨市の先人、記録残す」という見出しで、「1828（文政十一）年に起きた越後地震の様子を三味線で弾き語った盲目の旅芸人、瞽女の地震口説を1849（嘉永二）年に飛騨市神岡町森茂の人が書き留めた文書が、新潟県中越地震の発生に伴って脚光を浴びている」と報じ、また2004年11月12日付『中国新聞』地域ニュースでも広島県神石高原町の民家で「越後地震盲女口説」の写本が見つかったことを報じている。事件を広めた江戸時代の俗謡の力には目を見張るものがあって、大いに興味をそそられているのだが、災害の実態がどうだったかを知るには不充分で、罹災事実の報告を目的とした他の資料が望まれる。

ここでは、公的な文書である〈資料２－Ｃ〉を除き、『新潟の生活文化』誌に相応しく民間人が当人の見聞として記録した文献をいくつか掲げ、過去の三条地震の一端を知る手がかりに供したいと思う。

〈掲載資料について〉

資料１　鈴木牧之「文政十一年戊子冬十一月十二日朝五時（いつつどき）、越後長岡領地震之記」

曲亭馬琴著『兎園小説拾遺』の「文政十一年戊子の秋、西国大風洪水、并に越後大地震の風説」と題する文中に引用する鈴木牧之の12月３日付の書簡で、翌文政12年（1829）正月28日、江戸の足袋商人二見屋忠兵衛なる者に託して馬琴に届けられたものである。鈴木牧之は越後塩沢の人で、馬琴の言によれば彼の「旧友」であった。『北越雪譜』の著者といった方が分かりやすいだろう。

馬琴は、牧之の書簡その他の風聞にもとづいて被害状況を次のように書き記している。

「長岡は、城も聊破損して、死せしもの、疵をかうむりし士庶、凡そ九百九十余人也しとぞ（この事公儀へ御届の人数也と云）。この他、三条、村松、新津、燕、今町、与板辺、凡拾里四方、この地震によりて、廬舎倒れ、人死すること三千余といふ。三条に本願寺の掛け所あり、この辺殊に甚しく、本堂（十二間に八間）庫裏転倒し、剰、失火してければ、一宇も残らずとぞ。予が相識なる鈴木牧之は、越後魚沼郡塩沢の里長也。聞くに塩沢辺は恙なし、当時地震も甚しき事なかりしといへり。」

また、同じく馬琴の文中には「十一月初旬より折々地震あり、終に十二日に至て甚しかりけりとぞ」ともあって、本震の前触れと思われるような小さな地震の発生があったことがこのときの特徴だったことも知れる。

牧之の書簡に記載される被害状況を簡略化して全壊家屋数と人的被害だけをまとめて示すと次のようになる。

	全壊家屋	死者	怪我人
長岡町	１８軒	４人	
長岡北組村々	１，０８５	１８６	１４５人
椿　沢	１２４	２４	
田井村	１７	１７	
棚野村	１３０	３７	
大田村	５７	１７	
栃尾町	未詳	０	
見附町	（ほとんどの家屋が全壊し、横死怪我人多数）		
今　町	（ほとんどの家屋が全壊）		
三条町	２，９１８	８６０	多数
脇野町	５７	０	
与板町	３５０	３５	

上記の数字だけでも全壊家屋4,756軒、死者1,180人である。しかし幕府への報告では長岡の死者が406人（資料２）と216人多く、また被害が大きかった見附地区や今町地区は数えられていないから、三千人以上と馬琴が言っているように、実際の死者はさらに多かったはずである。（『見附市史』上巻（1981.）によれば見附の死者は135人という。）

いたがき　しゅんいち
〒951-8155　新潟市関屋堀割町1-2（自宅）

加茂・新発田・新津・水原方面は土蔵の壁が落ちた程度で被害は軽微だったらしい。

ちなみに昨年の中越地震の被害状況は、2004年11月13日付の新潟日報によれば次の通りだった。

死者　　４０人
負傷者　　２，７６１人
避難者　１２，１４３人（震災直後は最大時で十万人超）
全壊住宅　　８１７棟
半壊住宅　１，８３９棟
その他　住宅の一部破損や電気・水道・ガス被害多数

時代や季節が異なるから単純な比較はできないが、今回の地震の特徴は夕食時であるにもかかわらず火災件数が意外と少なかったことである。

※本文：『兎園小説拾遺』は『新燕石十種』第七巻所収のものを用いた。

資料２　「子十一月十二日辰上刻、越後国大地震、古志郡・蒲原郡之内、大損じの場所あらまし」

『浮世の有様』巻之一（『前代未聞実録記』）に掲載される。『浮世の有様』の著者は未詳であるが、大阪の町医者と推測されている。内容は文化３年（1806）から弘化３年（1846）、著者22歳から62歳にかけて執筆された見聞集。全十三冊。

ここには、文政11年の越後地震に関する資料として、

A　南久宝寺町中橋筋西へ入る南側の金屋平兵衛方へ、越後の得意先から送られてきた書付の写し（子十一月十二日辰上刻、越後国大地震、古志郡・蒲原郡之内、大損じの場所あらまし左之通）

B　同所から送られたものだが送付先が異なり文面が若干相違する書付の写し（文政十一子年十一月十二日辰の刻、越後国古志郡・蒲原郡大地震の事）

＊文中に著者が「右、外方へ申参り候書付にて、前文と少々相違の所これあり候に付写置く」と注記している。

C　幕府へ出された御届の写し（十一月十二日朝大地震、公儀へ御届之写）

の３点を載せるが、ＡとＣを紹介し、ＢについてはＡと異なる部分のみ（　）に入れてＡの文中右側に傍書した。

Ａ・Ｂは同じ者が書いた書状であるというが、かなりの相違が見られる。別人の報告、あるいは時間を置いての報告であれば当然あり得ることであるが、ほとんど同じ時期に発送されたと思われる同一人の書簡であってもこのような相違が見られることは注意してよいだろう。

なお資料Ｃの図中、注記１に弥彦山と角田山の間を震源とし、そこから震災地域を二本の線で囲ってある点も当時の地震認識を示すものとして興味深い。

※本文：『浮世の有様』は『国史叢書』（大正６年刊）所収のものを用い、『日本庶民生活史料集成』（1973. 三一書房刊）第十一巻所収のものを参照した。

資料３　『巷街贅説』巻之二「越後国大地震」

『巷街贅説』の著者は、序文に塵哉翁と記すが未詳。江戸在住の者と思われる。文政12年（1829）、著者四十八歳頃の自序がある。全七巻。

ここに掲げた記事はどれだけ正確な情報か疑問はあるが、これによれば中越を中心に新潟までも揺れたこと、大地の地割れからはいわゆる液状化現象によって土砂が吹き出したこと、発生した火災は季節風によってたちまち燃え広がり多くの死傷者を出したこと、百日以上も余震が続いたこと、粗末な仮設住宅に住んでいた住民には冬の寒さも重なって病人が多く出たこと、越後および近辺の藩から救援物資を送ったがなかなか十分には行き渡らなかったこと、などが述べられている。

※本文：『巷街贅説』は『近世風俗見聞集』第四（『続日本随筆大成』1983. 吉川弘文館刊）所収のものを用いた。

資料４　与板長明寺「過去帳」

この地震に関しては、より情報が得やすかったと思われる地元の人が書いた文献もある。与板町の長明寺住職であった前波善学の著書『与板史・続こぼれ話』によれば、長明寺の過去帳には、当時の罹災状況を記した記述があるという。

文中、死者一万人といっているのは推測に過ぎず、確かなことではないと思われるが、与板や三条、また長岡の死者数については誇張がない。ただし、三条町の死者は千余人といっているが、『三条市史』（1983.）では、三条町を含む全体で死者1,559人、怪我人2,666人としている。

※本文：前波善学著『与板史・続こぼれ話』（与板町教育委員会、1976年再刊）によった。ただし、読みやすいように私意によって現代語に改めた。

○スペースの関係上、資料１の鈴木牧之書簡「越後長岡領地震之記」の〈凡例〉をここに掲げる。

＊読みやすさを考えて漢字に読み仮名を付けた。

＊数字における壱・弐・拾などの漢字表記は、それぞれ一・二・十と変えた。また、有之はこれ有り、可及大変は大変に及ぶべし、不残は残らずとするなど、漢文的表記は書き下した。乍然は「さりながら」と平仮名にした。

＊助詞表記の者・之などはそれぞれ「は」「の」とした。

＊句や文の区切りはすべて「、」となっているが、文の区切りはそれを「。」に変えた。また読点も多少補った。

資料1

鈴木牧之「文政十一年戊子冬十一月十二日朝五時、越後長岡領地震之記」

一、長岡町
潰れ家十八軒、半潰廿三軒、横死四人、土蔵壁落三百八十宇

一、長岡北組村々、三十三ケ村
潰れ家千八十五軒、半潰四百十五軒、怪我人百四十五人、横死百八十六人、寺院十一ケ寺、馬五疋、長屋廿四軒、深山御蔵

長岡栃尾組村々

一、椿沢
家数百三十軒これ有る処、建家幾に六軒残り、横死二十四人

同
一、田井村
同二十軒これ有る処、建家三軒残り、横死十七人

同
一、棚野村
同百三十軒これ有る処、残らず潰れ、横死三十七人

同
一、大田村
同六十軒これ有る処、建家三軒残り、横死十七人

同
一、栃尾町
此栃尾町は潰家もこれ有り候へ共、格別の事これ無く候。さりながら、城山大疵入候間、抜落候はゞ大変に及ぶべしとて、栃尾惣町小家共転宅大騒動の由。

一、見附町
惣潰家の上、失火にて焼亡いたし、やうやく五六軒残り、横死人怪我人甚多、未その数を知らず。

一、今町
建家残らず潰れ、残り候家五六軒に過ぎず候、是も半潰れ也。

一、三条町
潰家二千九百十八軒。右潰れ候上失火にて大抵焼亡、残る所二三の町少し残り候へ共、是も半潰也。但三四十軒残り候よし。横死八百六十人、怪我人は数を知らず。本願寺掛所、四坊皆潰れ、且焼亡畢。

一、脇野町
潰家五十七軒、横死人はこれ無きよし。此処は軽し。

一、与板町
潰家三百五十軒、半潰九十軒、横死三十五人
右、与板より長岡迄在々、潰家これ無きは稀也。枚挙に遑あらず候。加茂、芝田、新津、水原等は無難の由、さりながら、土蔵の壁は大かた揺落し、庇等はいたみ候へ共、他処よりは軽く御座候。

一、拙家の入魂、三条の小道具屋、小高屋宅右衛門と申者の忰、商ひに参居候処、右地震にて早速下船仕候。然所、同人の家も潰れ、且焼亡、土蔵も壁落候に付、直に火かかり、鍋一ツ出し得ざる仕合に御座候。此小高屋は北越第一の小道具屋にて、珍敷茶器、刀剣、掛物等所持致し候処、残らず焼失。其上、地震後雨雪に成候故、立ばもこれ無く罷在候に付、御堂の崩れかゝる大門先に一夜あかし、寒さに堪へず候得ども、翌日に至り、一飯を贈るものもなく、只失火の処え近付候て、火にあたり、命からがら凌候よし。三条は越後の中央にて、金銀融通よく、富家多く候処。一時に灰燼となり、良家の女房、娘、平生定綺羅に候へば、その絹布の上へ雨雪を受、是非無く菰俵を身に覆ひ、両三日路頭にさまよひ候事、古今未曾有の珍事に御座候。家の潰れ候下では、やれ助けてくれ助けてくれと叫び、或は泣さけび候有様、あはれなりし事のよし。種々承り候事もこれ有り候へども、筆紙に尽しがたく候。父子夫婦の間、眼前に横死の有様を見候得ども、いたし方もなく、貴賤となく家毎に、五人三人焼死し候へども、葬を助るものもあらず。銘々焼跡の畑などを穿て、そのまゝ埋め候もあり。或はその死骸知れず、辛じて骨を拾ひ候も多し。家は潰れ候へども、手伝ふて片付るものもなし。土中は大かたわれ候て、泥をふき出し候間、往来も自由ならず、その混雑愁嘆御察し成らるべく候。塩沢辺は当時何事もこれ無く、無難に候へ共、度々小地震に困り入申候。今朝も一度、昼後も一度地震にて、火難も気づかはしく、家内のもの一統におそれ申候。乱書判じ御高覧成し下さるべく候。

十二月三日　　鈴木牧之拝

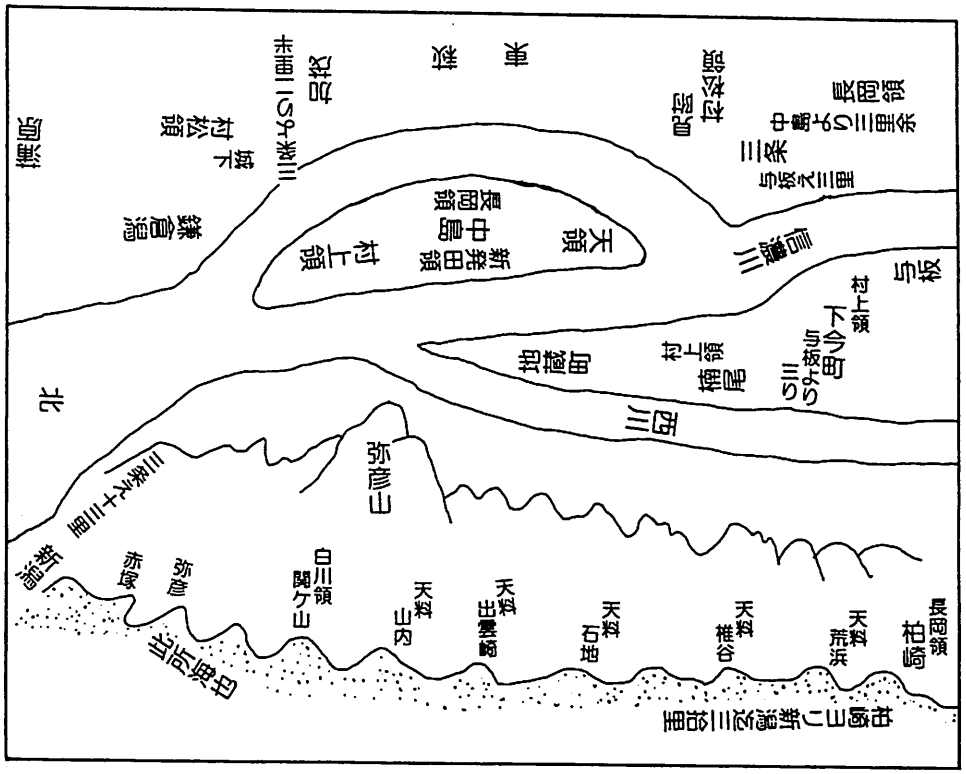
資料2

〈凡例〉＊「有之」は「これ有り」、「無之」は「これ無く」、「候得共」は「候へども」、「不知数」は「数知れず」、「不残」は「残らず」とするなど、漢文的表記は書き下した。
＊旧字体は今日通行の字体に変えた。
＊読みやすいように読点を補った。
＊助詞表記の者・之・迄などは、それぞれ「は」「の」「まで」とした。
＊（ ）内は資料2－B「文政十一子年十一月十二日辰の刻、越後国古志郡・蒲原郡大地震の事」から抜き出したもので、本文と大きく相違する箇所である。

A　「子十一月十二日辰上刻、越後国大地震、古志郡・蒲原郡之内、大損じの場所あらまし左之通」（「前代未聞実録記」より）

一、妙見宿、是より牧野備前守様御領分、長岡より三里（一里）の間、田畑大に損じ、大地裂け、土砂吹出し、村々人家数多崩れ候へども、死人はこれ無く候。
一、長岡城下、四の町にて一軒、千手（ママ）にて三軒崩れ。（神田にて八軒崩れ、新町）神田八軒、荒町三百軒余の処、二十軒（十軒）計相残り、跡皆崩れ。（長岡より見附宿今町まで）長岡より今町まで三里の間に、村数あまたこれ有り候へども、通り筋村々にて、家数二十軒計り相残り、其余総崩れ。（下今町八町程の所、西一町残り、二町程焼失）
一、今町八町程の在処、一丁計り残り、二町半焼失。（其余残らず崩れ）其余は崩れ。死人五十人、（怪我人数知れず）焼死は数知れず。けが人同断。
一、見附宿、家数六百余軒の処、漸く三間（ママ）相残り、三町計り焼失。残は皆崩れ。死人六十人、焼死数知れず。けが人同断。
一、元町（元村）にて寺一箇寺相残り、其余は皆崩れ。此辺、堀丹後守様御領分、大茂宿より、善峯、其外、本成寺村まで三十箇村総崩れ。
（一、大西村にて八軒崩れ。是より山通りにて所々家崩れ。本城寺村総崩れ。）
一、三条町、家数二千軒計りの処、二丁にて十八軒、大手下にて二軒（一軒）、鍛冶屋町にて表通十軒（一軒残）残。寺は極楽寺・西願寺二箇寺のみ残り、余は焼失。尤も蔵・土蔵共。死人四百四十人（死人四百六十人）、焼死人幾百人共数相分り申さず候。けが人同断。
東本願寺掛所、御堂は勿論、御門・台所・座敷廻り、残らず焼失。此辺の村々、大損申し候。
一、一の木戸、松平右京大夫様御領分、町家総崩れ。死人百六十人（死人百十六人）、けが人、焼死未だ相分り申さず候。
（一、中野村、大竹屋出口門崩れ。小竹屋家崩る。）
一、貝はけ、新田、少しの村に候処に御座候へども、家数三十軒程地中へ三尺（三四尺落入、怪我人・無事人十八人残り、跡は皆死人）計り埋り、怪我人十八人、其余死人多くこれ有る由。
一、黒津村にて寺一箇寺残り、跡は皆崩れ。（死人六十人）近辺・近在より此寺へ死人持参り山の如しとの由。
一、与板、井伊兵部少輔様御領分、町家千軒計りの処、三つ一分残り、其余は総崩れ。死人五十人計りと申す事に候。
一、（脇町代官所、家数三百軒計りの処、下町は残らず崩れ。上町は大に損じ）脇之町、半崩れ。其外、近在村々莫大に損じ候へども、未だ相分り申さず候。
一、下越後、千の原・柴田・五泉、此辺は如何相成り候哉、相分り申さず候。只筋計り荒増申来候。
（一、地震、十二日辰の刻より、同十八日までゆり通し、十八日仕立飛脚便り、右の通、荒増申参り候書状、十二月九日写。）
右は南久宝寺町中橋筋西へ入る南側金屋平兵衛といへる金商売致し候者の方へ、越後得意の者より申来候書付の写なり。
（右、外方へ申参り候書付にて、前文と少々相違の所これあり候に付写置く）

資料A・Bの付図

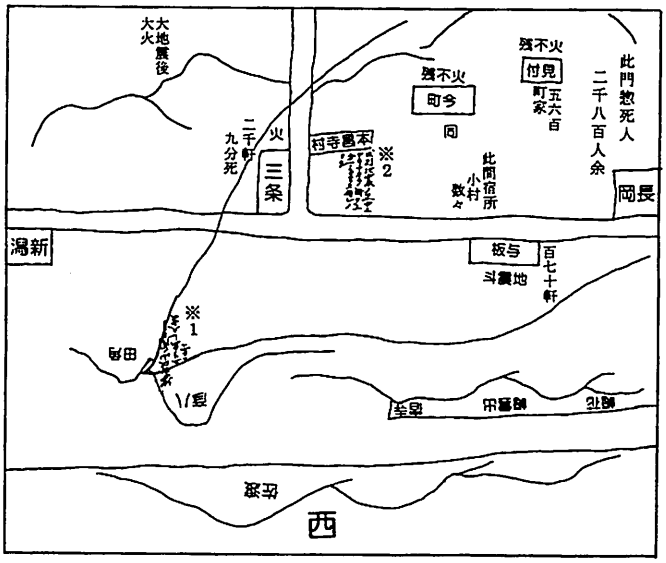


C 「十一月十二日朝大地震、公儀へ御届の写」

越後長岡御城下
五十三軒潰家
二千四百七軒　在方潰家
四百六人　死人
千五百余　半潰家
千五百余　怪我人
七十ケ寺　潰寺
十五人　坊主
牛馬数知れず
三ケ所、御米蔵
御城下、蔵三百七十の内、用立蔵三つ、三条・加茂・与板等、未だ評判取々にて、実説相分らず候事。

※1地震此山ノ間ヨリユリ出シ大変ニ至ル

※2此村地震ノ正中ニアリナガラ漸ク三分一ニモ足ラヌ損ジノヨシ



資料3　『巷街贅説』巻之二「越後国大地震」

○越後国大地震は、今茲文政十一子年霜月十二日也。辰の刻頃俄にゆり出す。長岡、新潟、三条、今町、見附、与板、つばめの在々村々、数多の家々ゆり崩すに、大地われて泥砂を吹出し、親は子を捨て、子は親を捨て、うろたへさまよひ逃さわぐに、ゆり潰したる家々より、火さへ出てもえたち、悪風烈しく黒煙天をおほふて、あやめもわかず逃行く先を火焔に包まれ、東西に走り、南北に迷ひ、怪我人死人の数をしらず、震納りても凡百日余騒動止ざりしとかや。漸掘立小屋をかけて集り住し、又山岸に穴を掘て住へるも多かり。今年はわきて寒さはげしく、雪さへ度々降りて、かゝる難義の仮住ひにこゞへ、病も猶多かりき。村上、新潟、与板、長岡、村松、桑名、会津、高崎の諸大名、其外、御料・御陣屋・旗本衆も、思ひ〳〵に手当あれど、事広くして行届がたく、越民ことゞくかん苦に絶たり。希代の変事ならず哉。

資料4　与板長明寺「過去帳」

十二日、五ツ時（午前七～八時頃）、頭上で雷のような音が鳴り渡り、世界中が胴ぶるいしたようであった。それは山も崩れるような大地震で、寺の御堂・庫裏ともにひどく傷み、戸障子や唐紙は微塵に砕け……（中略）。殿様の御殿は勿論、御屋敷、御長屋なども損傷を受け、町では全壊した家屋が三百二十軒、半壊が百軒ほどあるという。御上からはお慈悲として十日間ほど町中に炊き出しをしたが、南部は七日市村の辺りから、北部は大川津村辺まで、西部は乙茂村の辺から、東部は栃尾までの間は、とくに大被害だった。長岡もかなりの揺れだったが、御城下は大丈夫だったようだ。しかし、長岡領の北組・下河根組はひどく総潰れ。三条町は地震後、火災が発生して、御坊所も町も丸焼け。今町・見附町も、地震後の出火でやはり丸焼け。当所の与板でも横町東の片町が五七軒焼失したし、稲荷町・新屋敷は残らず焼け、焼死者は五十六人だった。地震の死者は三四十人にのぼり、怪我人は数知れずいる。三条町の死者は、およそ千人あまり。また、その日はちょうど市日だったから、他所から来て死んだ者も多数いたと思われる。長岡領の北組でもおよそ七八百人が亡くなったとのことである。このたび被害が大きかった地域を順にあげれば、一番が三条、二番が見附町、三番が今町、四番が燕町、五番が与板となるようだ。ほんとうに前代未聞の大地震だったから、六、七里四方のうちでおよそ一万人も死者が出たように推測される。先月の十二日から昼夜に限らず時々余震が起こり、今月十二月二日になってもまだ余震がある。とにかく今まで無かった大災害である。